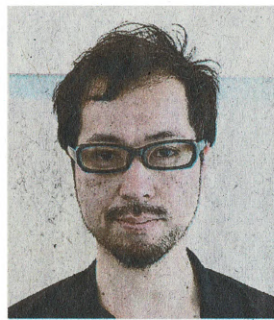


「コンセプトと美」

融合追求

八代市出身の美術家・下城賢一さん(46)が、4月に崇城大芸術学部美術

学科(洋画コース)准教授に就任した。熊本市中央区九品寺のホテル「RESTERS BED&CO.」ギャラリースペース



下城賢一さん

ースで、平面や映像の新作4点を展示している。6月9日まで。

下城さんは東京芸大で油彩画を専攻する一方、恩師の影響でインスタレーション(空間芸術)制作にも取り組んだ。同大学院修了後にドイツに4

年間留学し、現地で制作活動を続けた後に33歳で帰郷。九州美術ゼミナール(熊本市)で美大受験生にデッサンなどを教える傍ら、2012年から同大芸術学部の非常勤講師を務めていた。

「コンセプトと美しい

表現をいかに融合させるか。それが制作の核になっている」。創作の姿勢はドイツ留学時代に形成された。チェコ人の現代美術家の恩師から「工芸品のようにきれいな作品だが、何が言いたいのか」と問われた経験が大きかったという。以後は主題や素材などの意図を明確にすることに心を砕く。

展示中の平面は3年前から手掛ける「ろうとレンズ」シリーズ。「Helloingkeit 絶対輝度」は、滑らかで厚みのあるろうとで「混沌とし

た無意識」を表現し、中央に1列に配したレンズを通して「無意識が意識に上る様」を描いた。8Hの鉛筆でドロイングした上部の半円模様は、細胞が分裂するように事象が細分化される過程を伝える。

過去の個展やグループ展では、消え去った時間や忘れゆく感覚を表現したインスタレーション作品を多く出している。「見えないものを可視化した」という欲求が根底にある」と語る。

崇城大ではデッサンや油彩など基礎技法を身に付ける授業を担当する。「学生時代に出会った恩師のおかげで今に至っている。制作を続け、影響力のある作家になることで、学生が歩む道の選択肢を示していけたら」と話す。

(魚住有佳)

美術家・下城さん 崇城大准教授に

新作展示 意識化の過程表現

崇城大芸術学部准教授の下城賢一さんの新作「Helloingkeit 絶対輝度」